



令和4年度（2022年度）

中学校入学試験問題

国語

(60分)

注意

「始め」の合図があるまでは問題を開いてはいけません。

- 1 「始め」という合図で始め、「やめ」という合図ですぐにやめなさい。
- 2 問題は1ページから13ページまでです。
- 3 解答を始める前に、まず、解答用紙に受験番号と氏名を記入しなさい。
受験番号は5桁です。算用数字で横書きにしなさい。
- 4 答えは、すべて解答用紙に記入しなさい。
- 5 質問や用があるときは、声を出さずに静かに手をあげなさい。
問題の内容についての質問は受け付けません。

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。(字数制限のある問いは、句読点・記号も一字に数える。なお、設問の都合で本文を一部改めたところがある。)

1 上野村で知り合ったもう一人の村人の話をしてみることにしよう。上野村にはいくつかの保護林がある。ひとつはシオジの原生林で、五〇ヘクタールあまりの森が厳格な保護の対象にされている。シオジは見た目ではサワグルミとよく似た木で、林業をしている人でも間違うほどによく似ている。サワグルミは沢に近い谷底などに生えている木で、材質は柔らかくあまり用途がない。昔はマッチの軸によく使われた。それに対してシオジはケヤキのような材質をしていて、いまでも家具材としては高級材である。ほとんどが切り尽くされているから、まとまったシオジの森は上野村にしかないといってもよい。そんなこともあって①上野村のシオジの森は厳格に保護されている。

2 森のなかに保護林を設定するという動きが生まれたとき、この村人には一ヶ所保護してもらいたい場所があった。そこは少し山を上がったところにある比較的平坦な場所で、さまざまな落葉樹からなる天然林である。私と会ったとき、「あんな場所は他にはないのです」と彼は言った。「あの森のなかに座っていると、何時間でも時間を過ごすことができるのです」「時間というものが消え去り、次第に森と一体になっていくのです」「そうするとウサギたちがすぐ横を走っていったり、動物も鳥も警戒することなく私の横で過ごしていったりするのです。わたしもたくさん森のなかを歩いてきましたが、あんな雰囲気をもっている森、人間と自然の境がなくなっていく森はあそこにはないのです」。

3 その森は人間が自然に還る^{かえ}ことのできる森だったのである。だから彼はその森を保護するようにと主張した。その場所は国有林だったから、彼は当時の営林署、現在の森林管理署に頼みにいたり、さらにその上にある営林局(森林管理局)に保護林にするようにとⅠ陳情^{ちんじやう}にいたりした。だが話は聞いてくれても、彼の希望にかなう返事はもらえなかった。その森を保護するに値^{あた}する根柢^{こんてい}を客観的に示してほしいというのが、営林署や営林局の返事だったからである。(A) 特別に貴重な木が生えているとか、そこに貴重な鳥や動物が住んでいるとか、絶滅しそうな草花が群生しているとか、歴史的な文化財として貴重なⅡ遺構^{いこう}があるとか。

4 ところがその場所にはそんなものは何もないのである。どこにでもあるような落葉樹の森であり、しかもかつては木を切り出したりしたこともある場所だった。つまり原生林でもない。絶滅危惧種のような動物がいるわけでもない。②彼は何度^{なんど}も頼みにいっていたから、営林署や営林局の人たちもずいぶん困ったことだろう。

5 彼にとつてその森は、自然と人間の境が消えていく森であり、それゆえに「いのち」の根源を知ることのできる森であった。若い頃から森のなかで働いてきた彼が、歳をとつてみつけた森なのである。林業が彼の主要な仕事であり、だから彼は木は切つてはいけな^いと思つてはいない。森を維持しながら有効に活用する意義は誰よりもよく知っている。しかしその場所は、特別な場所なのである。訪れた人間たちに「いのち」の根源を教えてください。貴重な森として。

6 「どうしてわかってもらえないのだろうか」と彼は私に話しかけてきた。私も困った。いまの日本のルールでは、シオジの原生林のように、その理由を客観的に示すことが必要なのである。このルールで社会が動いているかぎり、彼の希望がかなえられることはないだろう。では彼の主張が間違っているのかといえばそうではない。森のなかには人間たちに不思議な気持ちを抱かせてくれる場所があるのは確かだ。私もずいぶん多くの森を歩いている。だがいまの社会のルールでは、彼の話は説得力をもたない。彼に協力し

ようとしても、私も「客観的根拠」を示すことはできないのである。

- 7 (B) 何が問題なのかといえ、ふたつの信じている世界の違いだ。彼は長いあいだ森のなかで働いてきた。森と対話してきたといってもよい。その経験が^③彼の信じていることのできる世界を生みだしてきた。その信じていることのできるものが集まっている純粹な場所が、その森なのである。ところが現代社会が信じているものはそういうものではない。科学的な考察のうえで「客観的根拠」を示せるものが貴重だという考え方を信じているのである。^④それが正しいと思っっているということは、そう信じているということだ。このふたつの信じているものは、けっして交わることはない。

- 8 森のなかを歩いていると、ときどき驚くような大木にであうことがある。シオジの原生林のように、大木がたくさんある場所ならそういう木が残っているのもわかりやすいが、周囲の木はまだ若い木ばかりなのに一本だけ大木が残っていることがあるのである。

- 9 上野村には一本で三百坪の土地を占有しているトチノキがある。それは林道から一時間ほど山を登ったところにあるのだけれど、その周囲にはまだ若い木しかない。ただただ驚くしかないような木が一本だけ残っている。

- 10 村の人間なら、その木がなぜ残されているのかはすぐにわかる。それは山の神が休憩する木だからである。そんなことはみればすぐにわかるのである。そういう木は、林業をしている人たちはけっして切らない。切れば山の神のバチにあたるという気持ちもあるし、それは犯してはならない木なのである。山の神は森を守っている神様で、かなり古くから信仰されている。文献的には古代からでてくるけれど、縄文時代から信仰されていると推測する人たちもいる。いまでも山村に行けばどこでも祀^{まつ}られている神様である。

- 11 この神様は、合理的な思考の持ち主には説明しにくい。森のなかで山の神に出会ったという昔の説話は各地にあるが、少なくともこの百年くらいの間山の神をみたという話は聞いたことがない。山の神を大事にしている人たちに「本当にいるのですか」と聞けば、彼らも困ってしまうだけである。(C) 山の神には教義らしい教義もない。山の神が森を守っているという以上のものではないのである。さらにこの信仰には、信仰組織も存在しない。信仰すると宣言しても、入る組織もないのである。だから入会することも、年会費のようなものも、入会していないのだから脱会することもできない。十二月十二日、もしくは一月十二日が多い地域での山の神の大祭で、そのときは山の神を祀^{まつ}しているところにいって酒と魚を供えるのが習わしである。いまでも山村では日本中でこの祭りはおこなわれている。山の神は女性神で、それも醜女の女性神だといわれていて、自分よりも美しいものに嫉^{しと}妬^とするとされている。自分よりも美しい女性が森に入ってくるのも大嫌いで、大祭のときにも、姿形が美しくない魚を供えるのが習わしである。多くの地域では、オコゼという魚を供える。

- 12 山の神の大祭のときには、はるか下流の漁村の漁師たちが魚をもって山に上るといいう習慣をいまでも維持している地域もあるし、東北を中心にして、山の神が春には田の神に姿を変えて田を守りにきて、秋には再び山の神の姿に戻って山に帰っていくという信仰も広く残っている。上野村には水田がないから田の神信仰も存在しないが、田の神を迎える祭りや山の神に戻った神様を送る祭りをつづけている山村は数多く存在している。柳田國男によれば、山の神と水神、田の神は同じ神様が姿を変えたものなのだが、いまでも広く信仰されている神様である。

- 13 出会ったこともなければ、教義らしい教義も組織もない。(D) 森とともに生きてみると、大事にしなければならぬ神様だと感じるようになっていく。そのことだけに支えられて、太古の昔から信仰されてきたのである。

14 　　そういう世界で生きてきた人たちには、山の神が休憩する木はすぐにわかる。だからそういう木は切られることなく、大木としていまでも残っている。

15 　　自然と人間の境がなくなっていく森を保護林にしてほしいと頼みにいった村人は、山の神がいる世界で論理的に信じていたのではない。彼の身体が信じさせ、彼の「いのち」そのものが信じさせていた。^⑤知性とは違う実感が彼にはあったのである。その彼の身体や「いのち」が、その森の貴重さを感じさせていた。彼にとってそれは信じるに値する実感だった。だがそれは、現代社会で生きている人たちが信じている「客観的根拠」にはほど遠いものであった。

（内山節『いのちの場所』より）

問1 二重傍線部Ⅰ「陳情」、Ⅱ「遺構」について、本文中における意味として最も適当なものを次のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

Ⅰ 「陳情」

- ア 役所に出向き文句や苦情を並べ立てうさ晴らしをすること。
- イ 官公庁に事情を述べて前向きな取り計らいをお願いすること。
- ウ 公的機関に理由を説明したうえで具体的な指示を出すこと。
- エ 地方自治体の部署に例を示して説明すること。
- オ 国の機関に対して自分たちの利益になることを強要すること。

Ⅱ 「遺構」

- ア 地下より出土した保存する価値のある資料。
- イ 今ではかえりみられない時代遅れの構造。
- ウ 亡くなった人が残した形見の品物。
- エ 現在なお使われ続けている歴史的な建造物。
- オ 壊れたりしながらも今に残る昔の建物。

問2 空欄（ A ）～（ D ）に入る語句を次のア～キの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

- ア なげなら イ それなのに ウ では エ あたかも
- オ しかも カ だから キ たとえば

問3 傍線部①「上野村のシオジの森は厳格に保護されている」とあるが、上野村のシオジの森が保護されているのはどうしてか。その理由を説明したものととして最も適当なものを次のア～オの中から選び、記号で答えよ。

- ア シオジの木は今でも高級な家具材としての評価が高いから。
- イ シオジの木は減少著しいケヤキの代替として使用されているから。
- ウ シオジの木は大半が切られたため上野村の原生林は貴重であるから。
- エ 現在シオジの木は切り尽くされ上野村にしか存在しなくなったから。
- オ シオジの森は人が自然に溶け込むことができる貴重な場所であるから。

問4 傍線部②「彼は何度も頼みにいつていたから、営林署や営林局の人たちもずいぶん困ったことだろう」とあるが、それはどうしてか。その理由を五十字以内で説明せよ。

問5 傍線部③「彼の信じることのできる世界」とは、どんな世界か。本文中から八字で抜き出せ。

問6 傍線部④「それが正しいと思っっているということは、そう信じているということだ」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを次のア～オの中から選び、記号で答えよ。

ア 現代社会で正しいと思われることは、真理であるかどうかに関わらず、現代の人々が正しいと思

い込んでいるだけだということ。

イ 現代社会で正しいと思われることは、状況に左右されず、科学的には正しいことになっているに過ぎないということ。

ウ 現代社会で正しいと思われることは、人々が迷信を否定することで、正しさを共有しているという

うこと。

エ 現代社会で正しいと思われることは、その根拠がはっきりしていることによって、誰もが信じる

ようになっていくということ。

オ 現代社会で正しいと思われることは、歴史的伝統によって定められており、疑う余地はないもの

だということ。

問7 傍線部⑤「知性とは違う実感が彼にはあったのである」とあるが、「知性とは違う実感」とはどんなものか。次の文の空欄（1）・（2）に入る語句を本文中からそれぞれ抜き出せ。ただし、（1）には六字、（2）には十五字が入る。

（ 1 〈六字〉 ）ではなく、（ 2 〈十五字〉 ）経験が生み出す実感。

問8 本文の文章構成の説明として最も適当なものを次のア～オの中から選び、記号で答えよ。

ア [1]～[6] 段落では村人がルールの前に打ちひしがれている様を描き、[7] 段落では科学的思考の行き過ぎを批判する。[8]～[14] 段落では山の神様を信じる一途な村人の姿を表し、[15] 段落では村人のような実直な人間を守るべきと主張する。

イ [1]～[6] 段落では村人が役人や私にとって困った存在であるとし、[7] 段落では村人の考えの問題点を探る。[8]～[14] 段落は山の神様の話をもとに村人の考えが形成された事情を示し、[15] 段落では村人が現代では生きにくいだろうと同情する。

ウ [1]～[6] 段落では村人が役人に不信感を抱いたエピソードを記し、[7] 段落では科学的なものの方の問題点を挙げる。[8]～[14] 段落では村人が素朴な信仰の世界に生きると論じ、[15] 段落では村人の価値観をもとに科学の限界を断じている。

エ [1]～[6] 段落では村人と役人の考えの食い違いを詳しく記し、[7] 段落は食い違いの生じる原因として信じる世界の違いを示す。[8]～[14] 段落は村人の生きる世界の背景をつづり、[15] 段落では何が村人にその世界を信じさせたのかを論ずる。

オ [1]～[6] 段落では役人に突っぱねられる村人の哀れな様子を示し、[7] 段落では村人に冷やかな態度を示す役人の問題点を訴える。[8]～[14] 段落では村人の生きる確かな世界を具体的に示し、[15] 段落で村人を冷笑する世の中を批判する。

問9 本文の内容以外にも現在の日本の森林や林業にはさまざまな問題がある。次の二つのグラフから読み取ることができる日本の「人工林」の状況を簡潔に答えよ。なお、「森林蓄積」とは森林を構成する樹木の幹の体積のことである。

